

教職コンソーシアム通信

学びの架け橋

人にまっすぐ。
大阪教育大学

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 01 学びの架け橋に期待すること | 05 加盟校出身学生・卒業生の紹介 |
| 02 リレーエッセイ | 06 加盟校の取り組み紹介 |
| 03 交流事業の紹介 | 07 大学トピックス／編集後記 |

『学びの架け橋』に期待すること

文部科学省大臣官房文教施設企画部長 中岡 司

恩師という言葉をおくるとき、つかたじけない思いがこみ上げます。学校生活を振り返った時の、やさしい姉のようなあるいは厳格な父のような教師の記憶が理想となり、世代を超えて多くの学生を教職にいざなっています。

教職は息の長い職であり、現在学校に通っている子どもたちは22世紀を切り拓いていく未来の大人たちです。将来にわたって幸せに生きるすべを次世代に引き継いでいくためにも、子どもたちを教え導く教師には時代の先を見通し学び続ける姿勢が必要です。

学校で先生の背中を見て教師になろうと考える生徒がいたとしても、授業やホームルームの場以外での教師の日常を見ていないかも知れません。校務の分担実施や生徒指導、新たな課題に対して授業研究に取り組む姿なども生徒からは見えにくいものです。

多くの大学で教師志望の学生に学校インターンを経験させていますが、学生にとっては現場の経験を通して早い段階で自ら教師としての適性に気づくきっかけとなるでしょう。教育実習に行き初めて教師に向いていないと気付くようなことでは遅すぎないように思います。

府立高校教職コンソーシアムでは、大学と連携し、高校時代から教師を目指す生徒に対し、教師になることを具体的にイメージできるような学習機会の創出に取り組んでおられます。このことは、教

職を目指す者に教職への適性を自覚させ、結果として教師に向いている者を天職に導くことにつながるでしょう。

昨今、高大接続改革の必要性が叫ばれています。高校での多様な学びを大学入試で丁寧に評価し、高校教育と大学教育の連続性を確保するためにも大学と高校とがお互いのことをよく知ることが大切です。「学びの架け橋」がより強固につながるためには、片思いでなく、等しい力で引き合う「協働」が必要だと思います。府立高校教職コンソーシアムの取り組みが、大阪の教育のさらなる向上をもたらすことを期待しています。

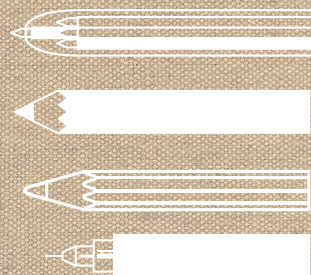


元大阪教育大学理事・事務局長
前文部科学省大臣官房審議官(初等中等教育局担当)



RELAY ESSAY

リレーエッセイ



教師冥利

大阪教育大学理事・副学長 入口 豊

将来は教師になりたいという私の思いは、大阪市都島区にある市立高倉小学校時代に芽生え、高倉中学校、府立清水谷高校を経て徐々に醸成されていきました。高校では、自由と男女平等の校風の中で多くの友人と先生方に恵まれて、次第に母校のような高校の保健体育教師になりたいとの思いが強くなっていき、大阪教育大学中学校課程保健体育専攻に15倍の難関を突破して何とか入学できたことがその後の私の教員生活へのスタートとなりました。

その後私は、学部生として4年間、専攻科進学後1年間の計5年間で池田分校で過ごした後、東京教育大学(現筑波大学)の大学院に進学して、修了後すぐに母校である本学の助手として採用されて今日に至っています。その時点で高校教員になりたいという夢は変わってしまいましたが、これからは教師になる人を育てる「教師の教師(Teacher educator)」という重責を担うことになるのだと自分に言い聞かせたことを覚えています。

それ以来約40年間も大学教員を続けてきましたが、教える対象が幼児から大学院生まで様々であっても、長い間教員生活を送った人なら教師になって良かったなと思える瞬間が沢山あるはずです。その一つが何年も前の教え子達との再会です。すっかり成長した彼・彼女たちとの再会と昔話に花を咲かせることができるのも、他の職業では味わえない「教師になって良かったなと思える瞬間」、すなわち「教師冥利」を味わうことのできる瞬間の一つです。多くのベテランと言われる先生方がこの「教師冥利」を多々味わい、自分の仕事の糧とされているのではないかと思います。

私自身の例をあげると、私の一番最初の教え子で当時サッカー部主将であった府立春日丘高校の森本教諭の息子さんを同じサッカー部で親子二代続けて教え、その彼も卒業と同時に父親と同じ府立高校教員になり現在活躍中です。その他にも多くの教え子の子どもさんと接し、お父さん、お母さんの学生時代の話に花を咲かせてきました。また、その森本先生の同級生で、私のゼミ室出身の当時体操部だった向井さんが、向井現大阪府教育長の実妹であることを、先日来訪された教育長ご本人から聞かされて驚いたのもつい先日のことでした。

今年9月初旬のある日、入試関係の仕事で千里高校に同校サッカー部出身で現在本学サッカー部の選手2名と女子マネージャー1名を伴って訪問する機会がありました。本学サッカー部は、近年強豪私立大学に混じって関西1部リーグに名を連ねる唯一の国公立大学で、長年にわたって監督を務めてきた私にとっても自慢の存在です。そしてこのチームの主力になっているのが千里高校サッカー部出身者なので、私もそのお礼方々是非訪問したいと思っていました。学生たちは、大阪の高校サッカー界の名指導者で、厳格なご指導でも有名な姉崎先生に久しぶりに再会することに緊張していましたが、林伸一校長と姉崎先生はにこやかに我々を出迎えて下さいました。そうこうするうちに、姉崎先生が中座されて、今度は本学卒業生で私の教え子にあたる同校勤務の2人の保健体育教諭を連れてきてくれました。校長室でお互いの教え子を交えたしばしの談笑は、正に「学びの架け橋」が幾重にも連なっていることが実感できる「教師冥利」につきる楽しいひと時となりました。

ほとんどが80歳以上になっておられるものの、私は今でも小学校、中学校時代の恩師の先生方と年賀状のやりとりを続け、最近もそれぞれの先生のご自宅を訪問させて頂きました。思い出話に花を咲かせる時の先生方の嬉しそうな顔を拝見すると、自分もこんな素晴らしい先生方と出会えた幸せを改めて感じる事ができ、同じ職業に就いて先生方のその思いを引き継ぐことができている喜びを痛感しています。

教師を志す高校生の皆さん。教育現場は厳しいことも沢山ありますが、教師になれば他の職業にはない「教師冥利」を味わうことのできる幸せな瞬間が必ずやってきます。その魅力を味わうためにも、是非とも前向きに教師になるチャレンジを続けて欲しいと思います。



入口 豊 いりぐち ゆたか
大阪教育大学理事・副学長
(学生担当理事)



交流事業の紹介

EXCHANGE
PROGRAMMES

「教育は人なり」。教師塾「教師の学び舎」を開講

教師塾「教師の学び舎」を7月25日(土)に天王寺キャンパスで開講し、約30人の高校教員が参加しました。

これは「府立高校教職コンソーシアム」に加盟する高校の教員を対象に、「授業力向上」や「生徒指導・生徒理解」などの3回完結のテーマ講義を提供し、さらなる実践力向上や得意分野の開拓に役立てることを目的としています。

開講式では、本学の中西正人理事が「現在の教育課題を見据え、今回の講義を日頃の実践に重ね合わせ、学校現場に持ち帰り、全体にも還元してほしい」と激励しました。続いて、兵庫教育大学長、中教審副会長を歴任した奈良学園大学の梶田叡一学長が「大阪の次代の教育を牽引する先生方へ」と題して特別講演を行いました。梶田学長は「教育は人なり」「最大の教育環境は教師である」という言葉を示し、教師の力量を高めることの重要性を説いた上で、新しい学習指導要領や大学入試改革につい

て言及しました。

続いて、「授業力向上のアプローチ」というテーマを設定して、大学院連合教職実践研究科の木原俊行教授が講義しました。「生きる力」や「21世紀型能力」といった今日的な学力観の重要性や特徴を確認したのち、家庭学習やノート指導などに関する様々な事例を紹介しながら、学習意欲の向上や学習習慣の確立のための術を解説しました。また、習得型授業や活用型授業などについて、少人数のグループワークによる意見交換の機会を設けながら、留意点や教材開発のあり方を整理しました。

参加した教員からは「梶田先生の『学校は生徒を勉強させて賢くするための場である』という言葉が心に響いた。教育の原点に立ち返りたい」「大学の時に戻ったような新たな発見があった。早速改善プリントを作りたい」「今回学んだことを現場の若手教員にも還元していきたい」との感想が寄せられました。



中西正人大阪教育大学理事



梶田叡一奈良学園大学学長



木原俊行大阪教育大学教授



木原教授による講義



本学学生が母校で大学のPR活動を展開

本学学生2人が9月17日(木)、母校の大阪府立東住吉高校を訪問し、生徒たちに本学をPRしました。

これは、「府立高校教職コンソーシアム」が実施する高大連携事業の一環として、東住吉高校からの依頼を受けたものです。本学初の試みに、東住吉高校卒業生で本学2回生の西尾奈菜さん(教養学科自然研究専攻)と黒川永海さん(特別支援教育教員養成課程)が志願し、参加しました。

2人は6限目のロングホームルームの時間に教壇に立ち、本学に関心を抱く3年生の生徒25人に、大学受験時の対策や大学生活の様子などを語りました。西尾さんは9月から試験日までの勉強法やスケジュールを説明し、「もう9月と思うかもしれないけれど、まだ9月。あきらめずに、たとえ1%でも受かる可能性を信じて前に進んでください」とエールを送りました。黒川さんは本学の試験内容について触れ、「専攻によってセンターと2次試験の配点はかなり違います。どの試験に重点を置くべきかを把握することも、試験対策にはとても重要で

す」とアドバイスしました。また、くしくも2人とも浪人経験があり、その時のエピソードや心境もざっくばらんに披露すると、生徒たちはより熱心に耳を傾けて深くうなずいていました。

このほか、センター試験当日の対策として、服装の注意や昼休み時間の過ごし方などを時間軸にそって詳細に解説し、黒川さんの「お弁当は食べすぎると眠くなるので、バランスよく腹6分目ぐらいにしましょう」とのアドバイスには、教室中が笑いに包まれました。

生徒からは「先輩から受験対策の詳細な話を聞けて、まだ挽回できると安心しましたし、試験の心構えができました」「年の近い先輩から浪人時代などのリアルな話が聞けて、とてもためになりました」などの感想が寄せられました。

母校訪問について西尾さんは「大勢の前で話すのは緊張しましたが、みんなが真剣に聞いてくれて良かったです。今後も母校のために協力していきたいです」と手ごたえを感じていました。



加盟校出身学生・卒業生の紹介

くほ よしかず
久保 慶和 さん大学院社会科教育専攻1回生
豊中高等学校2010年度卒

—大学生活で印象に残っていることは？

沖縄の民族舞踊サークル「琉球鼓舞 いちゃりばちよーでーエイサー隊」で、4年間演舞を続け、3回生の時には副代表も経験しました。最近は運動会でエイサーを踊るのが流行っているらしく、小中学校で披露した時は、珍しさもあってか子ども

たちの目が輝いていて、こちらも楽しくなりました。

—「エイサー隊」の活動をしてよかったことは？

このサークルは90人の大所帯なので、各メンバーの意識の隔たりが大きい。でも意思決定は、全員の意見を集約しなければと思い、ミーティングを皆が集まりやすい時間帯に設定したり、休みがちな子には個別で話を聞いたり調整役を務めました。苦労もありましたが、子ども理解につながる部分ですし、何より皆で一つのことを成し遂げることはとても楽しい

ので、ぜひ子どもたちにも伝えていきたいです。

—将来の夢は何ですか？

どの校種の教諭になるかは悩み中ですが、いずれの場合でも、子どもたちと同じ目線で一緒に物事を考え、学校が楽しいと思える環境を作りたいです。

—教師になりたいと思ったきっかけは？

高校時代、将来何になりたいかを考えたとき、周りの先生たちの顔が浮かんできました。特に、地学の西野誠一先生の授業がとても面白くて、地学が苦手なばくもいつも楽しみにしていたので、自分もあんな面白い授業をしたいと思ったのがきっかけです。

—後輩に向けてメッセージをどうぞ。

大学は自分で何でもやらないといけない分、やりたかったことにはいくらかでも時間を作れますし、学生の自主性を尊重する校風、部活動が活発なところは豊校とよく似ています。教員養成の専門性の高さや、同じ夢を持つ仲間存在は総合大学では得られないものですし、豊校卒業生も数多くいます。ぜひ一緒に学びましょう！

すうど しょうた
数土 翔太 さん教養学科自然研究専攻4回生
三島高等学校2010年度卒

—ゼミではどんな研究をしていますか？

環境微生物学ゼミで、池や川の水質を調査し、生物が住むのに理想的環境なのか、それとも危機的環境なのかを検証しています。与えられた課題に取り組む高校での実験演習と違って、大学では、フィールドや材料を自由に設定できるので、地元の川の水質を調べることもできますよ。卒業論文では、この調査で得られた知見を応用して、従来のエネルギーに頼らない、エコなバイオ電池を開発しています！

—教師志望だと聞きました。

高校で化学が好きだったのですが、思うように成績が伸びず悩んでいたところ、化学担当の土永先生が、昼休みや放課後に個別指導をしてくれて、次第に成績も伸びるようになりました。初歩的なことを根気強く、丁寧に指導する先生の姿を見て、先生っていいなという気持ちが芽生えました。

—将来の夢も化学教師ですか？

大阪府の高校教師をめざしています。化学は大半の生徒にとって苦手意識の強い教科ですが、それをわかりやすく、面白く説明して、生徒全員を化学好きに

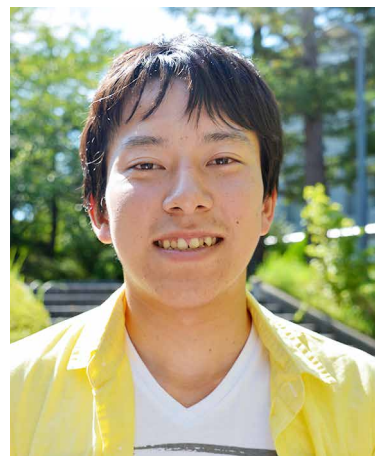
することが夢です。

—高校時代の思い出を教えてください。

ずっと野球に全力投球していました。仲間たちと一つの目標に向かって毎日打ち込めるのは高校ならではですね。土永先生のほかにもう一人、ぼくが影響を受けた先生がいて、それが顧問の宮脇先生です。普段はぼくたちの意見を尊重して口数も少ないのですが、熱い思いをぶつけると、熱くこたえてくれる先生でした。ぼくも野球部の顧問になりたいので、先生の背中を思い出しながら指揮したいです。

—後輩にメッセージを。

周囲に三島高校の卒業生がいないので寂しいです。ぼくは模擬試験D判定だったけれど入学できたので、あともう少しの頑張りがあれば、大教大進学も夢ではありません。ぜひ三島生で大阪府の教育を盛り上げましょう！





加盟校の取り組み紹介

MEMBER HIGH SCHOOLS' PROGRAMMES

大阪府立泉陽高等学校

生徒たちが将来にわたって幸福感を持って社会生活を送るためには、自らが真に望む職業、才能と特性を最大限に発揮できる職業に就くことが重要です。今回は特にキャリア教育と学力の定着に主眼を置いた取り組みをご紹介します。



<キャリアセミナー>.....

生徒が自らのロールモデルを見つけ、自分の将来像を描けるよう、1・2年生でセミナーを実施しています。特に2年生では、6日間にわたり社会の第一線で活躍する方22人を招き、自身の職業や学校生活についてご講演いただきます。

また、夏季休業を利用して、企業の研究所を訪問し、実際に研究作業を体験しています。

<生徒・保護者向け説明会>.....

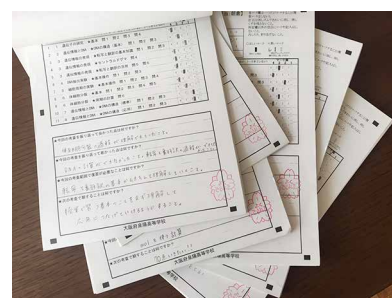
現今の大学入試の状況や今後の各大学の動向について、できるだけ当事者の生の声を生徒・保護者に伝えるために、学年別保護者進路説明会や大学の教職員による大学別入試説明会を実施しています。今年度の進路説明会には3学年それぞれ300名弱、入試説明会には生徒・保護者合わせて延べ800名弱が参加しました。保護者の方々の教育への関心が高く、さまざまな場面でご協力・ご支援いただきながら、オール泉陽で生徒の育成に取り組んでいます。

<定期考査の「振り返りシート」>.....

ほぼすべての生徒が4年制大学への進学を希望する本校では、これまでも学力の定着に重点を置いて学習指導を行ってききましたが、今年度から「振り返りシート」を活用し、学力の定着の徹底に取り

組んでいます。

定期考査の「振り返りシート」では、生徒自身が4段階で評価を行うとともに、よかった点と反省点、次回に向けたアクションを文章化します。教科担当者は補習・講習のポイントを確認し、授業改善に取り組みます。来年度からはこのシートを、学習のスタート時に配付する予定です。これにより生徒は、考査までに自分が身に付けなければならない内容(=「到達目標」)を前もって知ることができ、考査後に自ら評価を行えるようになります。



<中長期的な学力定着診断>.....

学習内容の中長期的な定着度を測るため、生徒全員が入学時から定期的にスタディーサポートと総合学力テスト、模擬試験を受験します。(図1)

これらもすべて「振り返りシート」を活用してテストとテストをつなぎます。前回との変化を比較し、次回の具体的な目標設定、目標実現に向けてやるべきことを、生徒自身が見える化します。テストの結果だけで一喜一憂することなく、常にゴールを見据え、そこに至る道筋を確認しながら、3年という時間の流れの中で自分の学力を見つめます。

<まとめ>.....

泉陽高校では生徒に対し、夢(=方向性)を抱くこと、理想の自分像(=具体的な目標)を描くこと、その実現に向けてしっかりと計画を練ること、立てた計画はきちんと実行することを求めています。生徒だけでなく教職員も含め、学校生活のあらゆる場面でPDCAサイクルを回すことにより、教育の質の向上を目指します。

(図1)3年間の学力診断スケジュール

	4月	6月	7月	10月	11月	1月	3月	
1年	スタディーサポート		総合学力テスト		総合学力テスト		スタディーサポート	基礎基本の徹底
2年			総合学力テスト		総合学力テスト		スタディーサポート	実践力の養成
3年		マーク模試		記述模試	マーク模試	センター試験	2次試験	実践力の伸長

フルートの祭典で 本学音楽コース学生デュオが優勝

「第17回フルートコンヴェンション2015ふじのくに静岡」で、教養学科芸術専攻音楽コース3回生の宮本颯斗さんと酒田結さんが、コンヴェンションコンクールのアンサンブル・アワード部門で優勝しました。

同コンヴェンションは、2年に一度開かれるフルートの祭典で、演奏会やコンクール、ブース展示などが催され、3日間で約2000人が来場しました。二人はフルートデュオとしてコンクールに出場し、プロ奏者もひしめく24団体の頂点に立ちました。

宮本さんは「曲の流れを大事にしながら2人の音色を調和させ、お客様へのアピールも意識しました」とコンクールでの様子を語りました。優勝の瞬間について、酒田さんは「絶対にこのコンクールで1位を獲るとの決意で臨んだので、もしかしたらという気持ちはありましたが、名前を呼ばれた時は驚きました」と語り、「これまでの優勝者はプロデビューするなど、活動の場を広げているので、わたしたちも実力を磨いているなどところで演奏していきたいです」と抱負を述べました。



障がいへの理解と意識啓発を 目的とした研修合宿を実施

障がい学生修学支援ルームが、2日間にわたり研修合宿を実施し、支援利用学生と支援協力学生らが参加しました。「知らないことを知る、知らない人に伝える、共に考える」をテーマに、日々の生活に潜む問題に気づくきっかけを得て議論を深めるとともに、学生間の交流を深めることを目的に開かれました。

1日目は、社会福祉法人日本ライトハウス盲導犬訓練所の角丸忠義氏を講師に迎え、盲導犬を取り巻く現状について学びました。角丸氏は「盲導犬には、触れない、話しかけない、目を合わせない、食べ物を与えないが鉄則です。街で見かけたときは温かく見守ってあげてください」と呼びかけました。講演後には、パラリンピック正式種目のスポーツ「ボッチャ」を楽しみ、交流を深めました。

2日目には、車いすに乗って学内を移動し、「視覚障がい者のための点字ブロックが、車いすではタイヤが引っかかる」「普段気にならない廊下の荷物が危険な場合がある」など、立場や視点が変わることで気づいたことを発表しました。



編集後記

長い夏休みが終わり、高校3年生はいよいよセンター試験への現実味が帯びてくる9月、今号の4ページに掲載の本学学生による母校訪問に取材同行しました。

恩師たちと「久しぶり、元気そうやね」「先生も」と答える学生の表情には、誇らしさと少しの気恥ずかしさが混じっていました。聞くと、高校時代に本学卒業生の話聞く機会があり、それでこの事業に関心を持ったとのこと。今回聞いていた生徒の皆さんが、来年は本学の学生として母校の教壇に立つ、そんな流れができればと願う次第です。

この学びの架け橋が、「高校と大学」だけでなく、「教諭と学生」「生徒と学生」をつなぐものとなるよう、微力ながら力添えができればと思います。

(S)